

平成17年度エリ網付着物調査

幡野 真隆・岡村 貴司

◆背景・目的

北湖のエリ網上にマット状の付着物が形成され、作業上の問題となっている。エリ網付着物の発生機構を解明する一環として、エリ網付着物のモニタリングを行うとともに、魚類等による付着物への捕食作用を検討した。

◆成果の内容・特徴

- 平成17年度の北湖のエリ網付着物量は地点により変動はあるものの、過年度と同程度の範囲内であった。また、付着物には以前のようなかび臭は認められなかった。
- 付着物の構成生物は昨年と同様、珪藻類が主体であり、5月以降の底層では「エダヒドラ」とされる腔腸動物の一種や*Phormidium* sp.が優先した。
- 魚類等による付着物への捕食作用を検討したところ、スジエビやタナゴは付着物を活発に摂餌する行動が観察されたが、アユは一部の構成生物のみを捕食した。
- Phormidium* sp.は糸状性緑藻や珪藻に比べ、捕食されにくい傾向があった。
- 「エダヒドラ」の捕食は、実験に用いた生物(エビ、タナゴ、アユ、モロコ、フナ)ではほとんど認められなかった。

◆成果の活用・留意点

- エリ網付着物の発生状況をモニタリングし、今後の動向を把握する必要がある。
- 付着物の発生要因を明らかにするため、捕食作用など生物間の影響を把握する必要がある。



写真 スジエビによる網付着物の捕食作用